

戦前期農家世帯の家族構成と就業構造
—福岡県農会『農家経済調査』個票データの分析（第1報）—

前 田 尚 子

**Family Structure and Labor Supply Patterns of Farm Households
in Prewar Japan: An Analysis of Farm Household Survey
Micro-Data in Fukuoka Prefecture (Part 1)**

Naoko Maeda

要旨

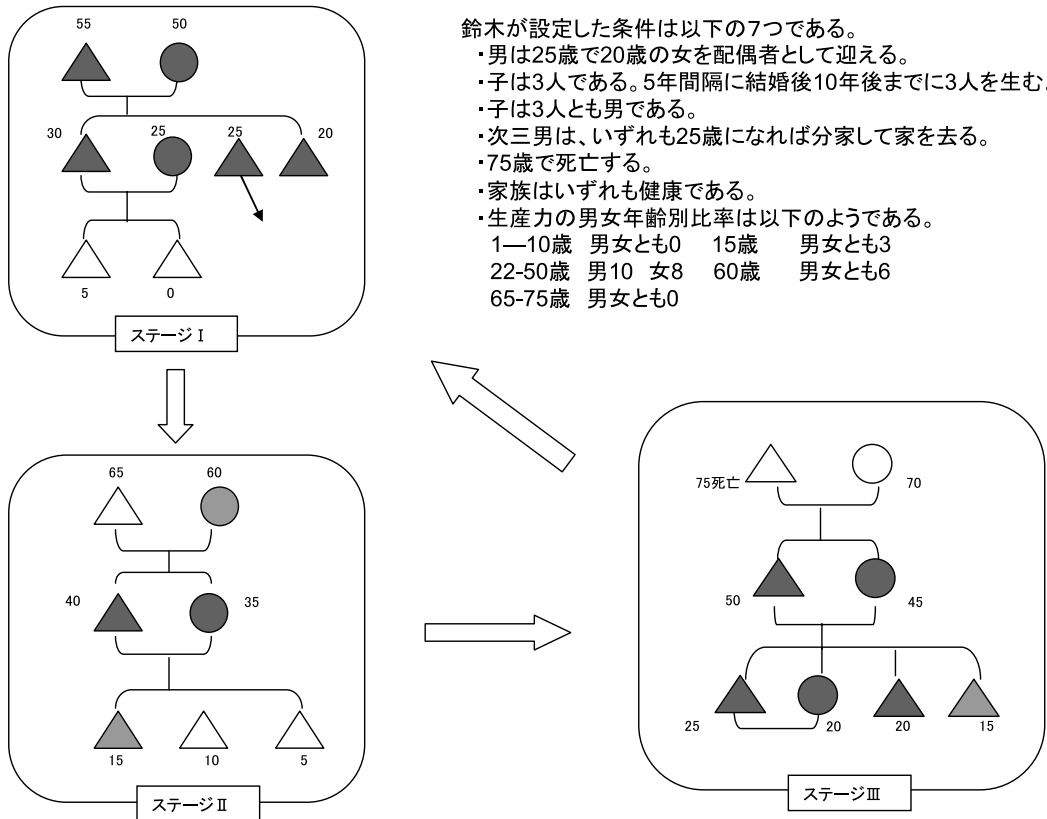
本稿では、福岡県農会が実施した農家経済調査のパネルデータをもとに、戦前期の農家における家族構成と就業構造の変遷を分析した。その結果、人口学的条件が整わないために、典型的な直系家族の家族周期から外れてしまう農家が少なくなかったことが分かった。さらに、鉱工業が目覚ましく発達した福岡県では農外就業機会が豊富であったため、農外収入をもとに自作農化を図った事例がみられた。ただし、家族構成によって農外就業機会の活用の仕方は異なっていた。世帯内に傍系親族がいる場合は傍系親族が常雇の賃金労働者となるが、いない場合には経営主が兼業労働者として農外労働にも従事していた。

キーワード：家族構成 就業構造 戦前期 農家経済調査 福岡県

1. はじめに

「総領の15は貧乏の峠」「末子の15は栄華の峠」。鈴木栄太郎が戦前の農家における経済的浮沈の周期的律動を表現するものとして引用したことわざである。鈴木は、寿命・結婚年齢・産児数・分家する場合の年齢等の人口学的条件を一定として計算を行い、ことわざには根拠があることを明らかにした¹⁾。彼によれば直系家族の周期的律動は、家族構成と就業構造の変動によって説明できる。図1は、彼が行った計算結果をもとに直系家族の世代的循環を図式化したものである。いずれのステージにおいても、直系2世代の夫婦が基幹的労働力であり、成人した傍系親族の有無と、高齢者や未成年の子など扶養者の増減によって経済的浮沈が生じることが分かる。ステージⅠでは、直系2世代の夫婦に加えて、成人した傍系親族がいる。扶養者は2人の幼児のみであるため、生活には比較的ゆとりがある。ここから10年が経過したステージⅡは、総領の15の年である。親子2世代の夫婦は揃ってはいるものの、親世代はすでに老境にさしかかっている。子どもは3人とも未成年である。そして、傍系親族は分家している。労働力は少なく扶養者は多いため、生活が窮迫するのである。さらに10年が経過したステージⅢは末子の15の年である。父は75歳で死亡するが、代わって25歳となった長子が20歳の妻を迎えて、十分な生産力を持った直系2世代夫婦が存在している。さらに、成人した傍系親族もいる。扶養者は70歳の母と15歳の末子の

鈴木（1940:284-285）に基づき筆者が作成



みであるため、一家の勢力は最高に達する。そして、ここから5年が経過すると母が死亡し、長子夫婦に子どもが生まれ、ステージIに戻るのである。

鈴木は、家族構成が周期的に一定の形式によって変化していくことを前提としているが、彼自身が述べているように、現実にもこれらの人口学的条件がすべて満たされることはまれであった。当時の平均余命は短く、大正15年から昭和5年の間では、男性は0歳時44.8、40歳時25.7、女性はそれぞれ46.5、29.0であった。これをふまえると、図1のような典型的な周期をたどって直系家族の世代的再生産ができた農家はそれほど多くはなかったのではないだろうか。

さらに加えて、大正期から昭和初期における日本経済の変動は激しく、それともなって農産物価格も乱高下したため、農家経営も難しい時代であった。第一次世界大戦中は好景気に湧いたが、大戦終了とともに戦後恐慌が発生した。それをくぐりぬけて都市化と工業化がめざましく展開するなかで、農産物価格も高水準で推移するが、昭和2年には金融恐慌が起こり、長い不況の時代へと向かっていく。そして、昭和4年の世界恐慌をきっかけとして米価と繭価は大暴落し、昭和5年以降、農村経済は恐慌状態に陥る。

このような時代背景のもと、各農家は激動の波にさらされながらも、さまざまな家族戦略を駆使して生き残りを図ってきたと考えられる。本稿では、大正10年から昭和5年までの10年間にわたって行われた第Ⅱ期農家経済調査の個票データを分析し、農村恐慌に突入する直前の時期にお

表1 調査対象農家一覧

| | 地域の特徴 | 郡名 | 農家の種類 | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 | S2 | S3 | S4 | S5 | |
|------|--------------|-----|---------|-----|-----|-------------------|-------------------|-----|--------------------|--------------------|----|----|----|--|
| | | | | | | | | | | | | | | |
| 農家1 | 田を主とする地方 | 三潁郡 | 自作農 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 農家2 | | | 自小作農 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 農家3 | | | 小作農 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 農家4 | 田畑相半し養蚕を営む地方 | 朝倉郡 | 自作農 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 農家5 | | | 小作農 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 農家6 | | | 自小作農 | | ○ | 農家の都合により調査中止 農家7へ | | | | | | | | |
| 農家7 | 部分的共同経営をなす地方 | 宗像郡 | 自小作農 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 農家8 | 都会付近地方 | 遠賀郡 | 自作農(1) | ○ | ○ | ○ | 農家の都合により調査中止 農家9へ | | | | | | | |
| 農家9 | | | 自作農(2) | | | | ○ | ○ | 農家の都合により調査中止 農家10へ | | | | | |
| 農家10 | | | 自作農(3) | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 農家11 | | 遠賀郡 | 自小作農(1) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 農家の都合により調査中止 農家12へ | | | | |
| 農家12 | | | 自小作農(2) | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 農家13 | | | 小作農(1) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 農家の都合により調査中止 農家14へ | | | | |
| 農家14 | | | 小作農(2) | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | |

ける、農家の家族構成と就業構造の変遷をたどってゆく。それを通じて、この時代の農家が、ときには人の命の不確実さに翻弄されつつ、それでも家業の継承・発展をめざして時代の荒波と格闘し続けてきた様子を描き出してゆきたい。

この農家経済調査は、農林省の委嘱を受け、1府20県の農会によって実施されたものである。本稿で取り上げるのは福岡県農会が実施したものである^{2)~9)}。戦前期の福岡県は、農業県でありながら、一方で炭鉱業や製鉄業が飛躍的に発展した地域であった。いわば、日本の近代的重工業の先端基地であったといえる。後に述べるように、このことは農家の取りうる戦略的行動に際立った特徴を及ぼしている。

調査は、県内3地方（三潁郡・遠賀郡・朝倉郡）から自作農・自作兼小作農・小作農それぞれの「中庸な農家」を一戸ずつ選定し、それらの9農家に対して毎年調査を実施するというパネル方式で行われた¹⁰⁾。実際に10年間継続して調査できたのは4戸のみである。農家の都合により調査が打ち切られた場合には、同じ地域で同じ属性を持つ農家を選ばれ、調査が引き継がれた。そのため、調査対象となった農家の延べ数は14戸である（表1）。本稿では、このなかから3つの農家を取り上げる。調査項目は、農業収入、農業経営費、農業以外の収入、生活費、税負担、家族構成、労働時間など多岐にわたっているが、当時の調査担当者が述べているように、「農家経済調査の結果は毎年上梓して県下の郡市町村農会、其の他にも配布して参考に供して居る。然るに調査成績書は数字が多く従って余り顧られなかったの感がある」⁸⁾。本稿では、10年間にわたる数字の山のなかから、家族と経済と労働に関するデータを拾い出して時系列的につなぎ合わせていくことにより、個々の農家がいかなる機会や困難に直面したのか、そしてそれに対していかに柔軟にあるいは戦略的に対処してきたかを、できるだけ具体的に描き出していきたい。

2. 事例分析

2-1. 田を主とする地方の自小作農家（表1の農家2）

最初に取り上げるのは、三瀧郡^{みつたま}の自小作農家である。この事例は、人の命の不確実さゆえに、直系家族世帯の代代的再生産を行うことが容易ではなかったことを示すものである。三瀧郡は現在の大川市にあり、水郷で知られる柳川市に隣接している。この地方に特有のクレークに囲まれた水田地帯である（図2）。調査報告書によれば、「表作として水稻、裏作として麦類、蚕豆、馬鈴薯等で蔬菜類は単に自家用に栽培するのみで、養蚕は行わず藁加工品（縄、蓆）として藁細工が行われた水田主体の経営である」⁷⁾。

はじめに、表2「農家経済の推移」にもとづき、この農家の農業経営と家計の特徴をみておくことにしよう。調査開始時の大正10年の農業経営面積は16.5反、うち所有地は10.1反である。農業粗収入は1482円、農業経営費637円（うち小作料は333円）である。前者から後者を引いた農業所得は845円であり、そのほかに115円の農外所得がある。農業所得と農外所得を合計した農家所得は960円である。ここから農家の支出として、家計費1083円と税金等の諸負担101円を差し引いたものが農家経済余剰であるが、この年は224円の赤字となっている。

つづいて、表3「家族構成の推移」、図3「年間労働時間の推移」にもとづき、この農家における家族と労働の変遷を跡づけていくことにしよう。

調査開始時の大正10年、この農家は、経営主（41歳）、その両親（66歳・57歳）、経営主の3人の子ども（13歳・11歳・8歳）の直系家族6人に、経営主の2人の弟（22歳と18歳）の傍系親族を加えた8人家族であった。経営主の妻は不在であるが、子どもがいることから、死別あるいは離別したと考えられる。その後、大正13年には父が死亡し、その年の暮に経営主は33歳の後妻を迎える。図3「年間労働時間の推移」のなかの農事時間（図3-2）をみると、農業については父存命中から経営主が主担当者となっており、世代交代が進行していたことがわかる。家事時間（図3-3）をみると、それまでは母が一手に引き受けていたが、その後は経営主の妻と分担していく傾向がみられる。このまま順調にいけば、近い将来には成人の傍系親族が抜け、相前後して長男が嫁を取り、図1に示した典型的な直系家族周期のステージⅢに復帰していくようにみえる。

実際に、大正14年には他出中の上の弟が結婚し、大正15年には長女も婚出する。また、昭和2年には経営主の後妻が3女を出産している。その年には、上の弟にも子どもが生まれている。

農家経済の推移（表2）から家計の動向をみると、冠婚葬祭が度重なったため、とくに大正13年からは冠婚葬祭費が毎年300円を超えて、家計を圧迫している。それを支えるのは傍系成員である下の弟の農外収入である。この地域には良い働き口はなかったため、彼は11年から他町の家へ奉公に出ている。大正10年には115円に過ぎなかった農外所得が、大正11年から300円を超えるようになったのは、下の弟が177円、180円と送金してきているからである。

ところが、昭和2年にはその弟が病気になってしまう。奉公に出られないため農外所得は減少し、さらに768円という高額な医療費（保健衛生費）がのしかかってくるようになった。この年におけるこの世帯の収支（農家経済余剰）は547円の赤字である。翌昭和3年には弟自身が病身を押し、売薬の仕事をし、500円近い収入を得、さらに2女が奉公に出て70円仕送りしてきたために736円の農外所得があったが、それでも赤字である。昭和4年にはとうとう弟は26歳の若さで亡くなってしまふ。追い打ちをかけるように、19歳の長男も病気になり、療養のために100日

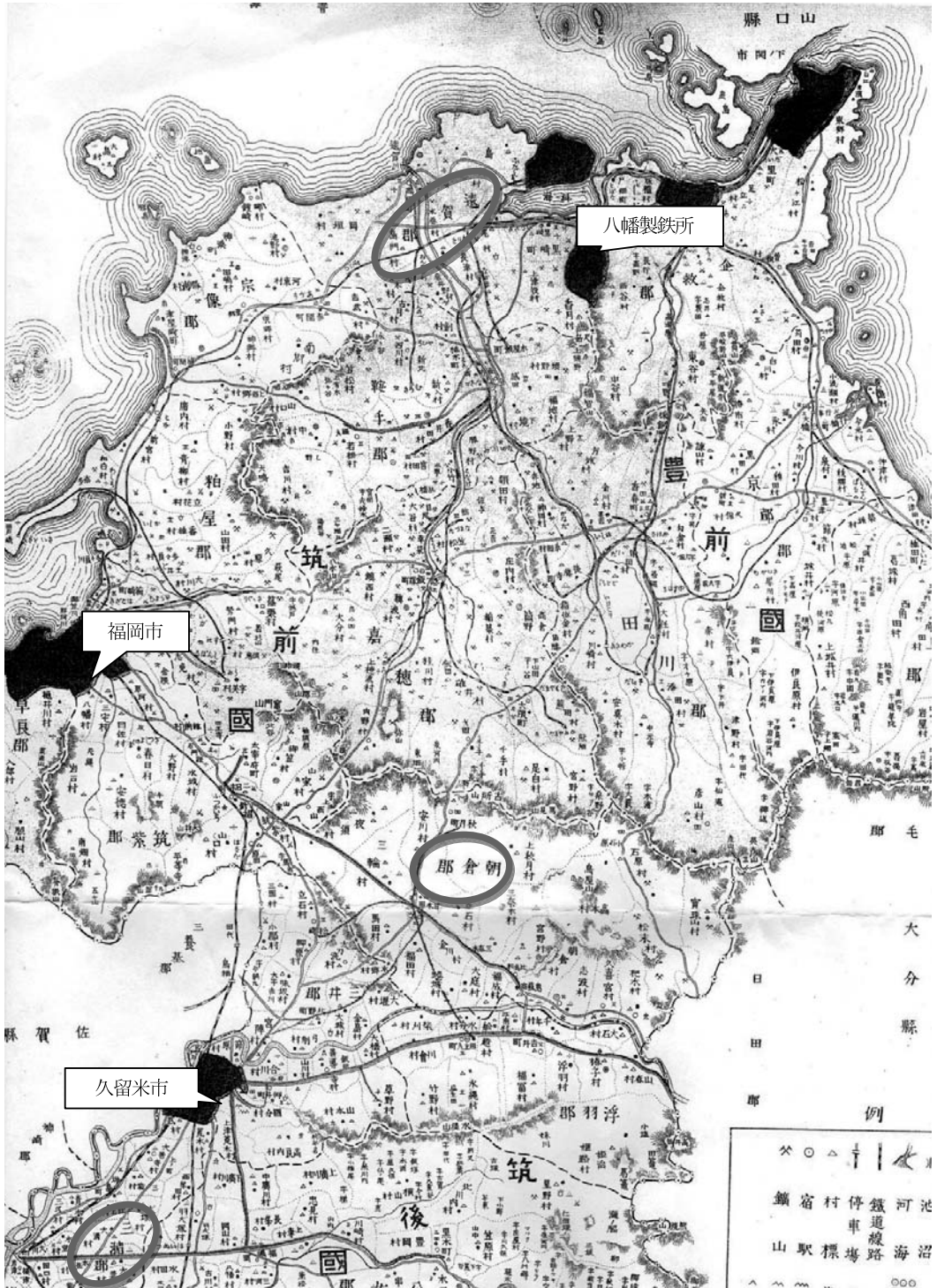


図2 調査対象地

表2 農家経済の推移（農家2）

| | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 ⁽³⁾ | S2 | S3 | S4 | S5 |
|----------------------|--------|--------|--------|--------|--------|-----------------------|--------|--------|--------|--------|
| 経営面積（反） | 16.5 | 16.9 | 17.0 | 12.5 | 12.2 | 12.3 | 12.2 | 12.2 | 11.0 | 11.0 |
| 所有 | 10.1 | 10.5 | 10.6 | 10.1 | 7.5 | 7.6 | 7.5 | 7.5 | 6.9 | 6.9 |
| 借入 | 6.4 | 6.4 | 6.4 | 2.4 | 4.7 | 4.7 | 4.7 | 4.7 | 4.1 | 4.1 |
| A 農業粗収入（円） | 1482.2 | 1153.2 | 1234.5 | 1660.1 | 1897.7 | 1788.4 | 1768.3 | 1336.9 | 1362.2 | 1094.7 |
| B 農業経営費 | 637.0 | 456.3 | 579.3 | 676.7 | 944.9 | 855.7 | 838.2 | 863.9 | 730.5 | 602.3 |
| 經常 | 637.0 | 436.8 | 579.3 | 663.9 | 838.7 | 838.0 | 804.4 | 807.1 | 712.6 | 587.0 |
| 臨時 | 0.0 | 19.5 | 0.0 | 12.8 | 106.1 | 17.7 | 33.8 | 56.8 | 17.9 | 15.4 |
| うち小作料 | 333.1 | 176.1 | 206.3 | 135.8 | 258.1 | — | 228.0 | 197.3 | 189.7 | 148.2 |
| C 農業所得 A-B | 845.2 | 696.9 | 655.1 | 983.4 | 952.8 | 932.7 | 930.2 | 473.0 | 631.8 | 492.4 |
| D 農外所得 | 115.0 | 348.7 | 311.0 | 411.5 | 240.4 | — | 203.3 | 736.2 | 430.5 | 302.4 |
| 俸給労賃等 | 115.0 | 287.6 | 289.7 | 241.8 | 171.9 | — | 127.6 | 636.8 | 133.2 | 93.3 |
| 財産利用収入 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 31.3 | 4.0 | — | 18.4 | 7.7 | 14.9 | 3.3 |
| 農業以外生産物収入 | — | — | — | 8.8 | 10.9 | — | 21.2 | 63.6 | — | — |
| その他農外所得 | — | 61.1 | 21.3 | 129.6 | 53.6 | — | 36.0 | 28.1 | 282.4 | 205.8 |
| E 農家所得 C+D | 960.2 | 1045.6 | 966.1 | 1394.9 | 1193.2 | — | 1133.4 | 1209.2 | 1210.4 | 891.4 |
| F 家計費 ⁽¹⁾ | 1083.5 | 925.4 | 827.8 | 1312.1 | 1339.2 | 1358.5 | 1589.1 | 1225.9 | 1361.6 | 890.8 |
| うち飲食費 | 60.5 | 470.9 | 395.0 | 490.8 | 475.7 | 480.2 | 371.5 | 368.3 | 439.3 | 273.1 |
| うち被服費 | 68.5 | 111.8 | 112.7 | 72.0 | 103.8 | 131.9 | 99.0 | 368.4 | 71.0 | 33.6 |
| うち保健衛生費 | 25.9 | 30.0 | 15.8 | 92.9 | 58.3 | 35.6 | 768.2 | 117.1 | 362.1 | 85.7 |
| うち冠婚葬祭費 | 194.9 | 22.3 | 37.4 | 305.7 | 314.1 | 346.3 | 12.8 | 26.3 | 168.6 | 243.0 |
| うち教育費 | 8.2 | 7.0 | 14.1 | 18.1 | 9.9 | 6.9 | 5.3 | 9.3 | — | 4.0 |
| G 諸負担 ⁽²⁾ | 101.2 | 96.8 | 97.7 | 95.1 | 92.1 | 83.4 | 90.9 | 93.7 | 122 | 113.4 |
| H 農家経済余剰 E-F-G | -224.5 | 23.3 | 40.6 | -12.2 | -238.1 | — | -546.6 | -110.4 | -273.2 | -112.8 |

(1) 大正10年の家計費は現金支出額である。それ以外の年は、現金支出額と現物支出額を合計した金額である。

(2) 大正10、12、昭和5年の諸負担の金額は農業に関わるもののみであり、それ以外は含まない。

(3) 大正15年／昭和元年に行われた調査の報告書（『農家経済報告書』第4編）は入手不能であったので、この列の数値はすべて『農家経済調査累年比較に就て（農家経済調査第6編付録）』から拾ったものである。

近く不在となる。さらに翌昭和5年には、経営主の後妻が39歳で亡くなってしまう。家事時間をみると、66歳になった母が、一度は譲った家事の主担当者の座に再び引き戻されている。それを17歳になった2女が補佐しようとする様子が見られる。

先述のとおり、この調査の対象は「中庸な農家」から選定されている。また、福岡県農会では、対象農家を「標準農家」とも位置付けている²⁾。これらをふまえると、典型的な直系家族の周期から外れた農家はあまり選ばれなかったと考えられる。それにかかわらず、典型から外れてしまった事例は少なからず見出される。ここで取りあげた農家2も、調査開始時の経営主は41歳の働き盛りであったが、その妻は不在であった。その後、父が死亡すると同時に後妻を迎えるが、彼女は子どもを一人産んだのち、まもなく亡くなってしまふ。農家労働力の根幹をなす跡取り夫婦の世代的再生産がなかなかうまくいかないのである。

また、この時代、死はわれわれが今思うよりもはるかに身近な存在であったが、それは重篤な病が身近にあったことを意味する。農家にとって家族の病気はそのまま労働力の欠落につながる。それに加えて、社会保障制度が未発達だったので、医療費は大きな負担となった。そのため「薄利なる農家に病人相継ぐ時は悲惨なること名状することが出来ない⁶⁾」のであった。

農家2の場合、度重なる冠婚葬祭と病気により、調査終了時の昭和5年度当初における借入金

表3 家族構成の推移（農家2）

（表中の数値は各年の年齢）

| 農家2 田を主とする地方自小作農 | | | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 | S2 | S3 | S4 | S5 |
|------------------|-------|---|-----|---------|--------|--------|--------|--------|----------|--------|--------|--------|
| 1 | 父 | 男 | 66 | 67 | 68 | 69(死亡) | | | | | | |
| 2 | 母 | 女 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 |
| 3 | 経営主 | 男 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 |
| 4 | 経営主の妻 | 女 | | | | 33(入婚) | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39(死亡) |
| 5 | 弟(上) | 男 | 22 | 23(入営中) | 24(他出) | 25(他出) | 26(結婚) | 27(他出) | 28(子供出生) | 29(他出) | | |
| 6 | 弟(下) | 男 | 18 | 19 | 20(奉公) | 21(奉公) | 22 | 23(奉公) | 24(病気) | 25(病気) | 26(死亡) | |
| 7 | 長男 | 男 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19(病気) | 20 |
| 8 | 長女 | 女 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18(婚出) | | | | |
| 9 | 二女 | 女 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
| 10 | 三女 | 女 | | | | | | | 1(出生) | 2 | 3 | 4 |
| 家族員の変動 | | | 8 | 8 | 8 | 8→7→8 | 8 | 8→7 | 7→8 | 8 | 8→7 | 7→6 |

と未払い金の合計は980円にのぼる。しかし、表2が示すように農業所得は492円にすぎない。家族構成は、66歳の母、50歳の経営主、病み上がりの20歳の長男、17歳の2女、そしていまだ4歳の3女からなる5人家族である。おそらく2女が奉公に出て家計を助けるのであろうが、焼け石に水にすぎないだろう。この農家はいかにして事態を乗り切っていくのだろうか。

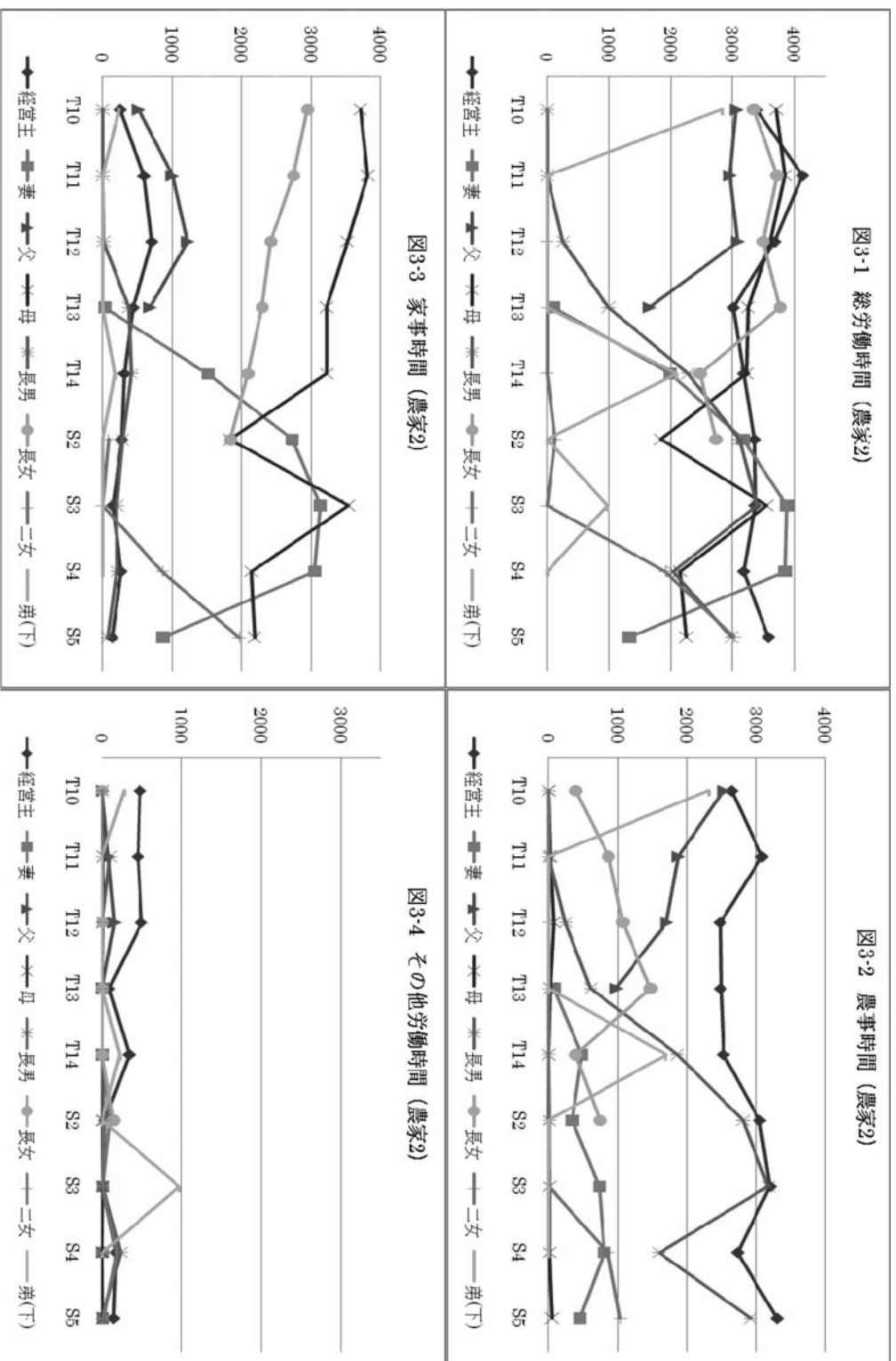
先述のように、この調査では延べ14世帯の農家について調べている。本稿で詳しく取り上げる3農家以外の家族構成の推移は、本稿末尾に付表1～11として掲げてある。それをみると、直系家族の世代的再生産が順調に進まない事例は農家2だけではないことがわかる。

例えば、農家8（付表7）は、期待の跡取りが急死するという災難に見舞われている。大正12年には、経営主夫婦（45歳と44歳）、母（71歳）、跡取りの2男（23歳）、3男（16歳）、4男（13歳）からなる6人家族であった。調査担当者いわく「極く平和な家庭で23歳の二男は模範青年にして営々として働き右の通り順調であった」。ところが13年には「其の二男死亡して両親の悲嘆は失神せんばかりであった。大事な家族労力を失った経営の結果は推して知るべきである。而して中学在学の三男の成人を鶴首して待ったのである」⁸⁾。

そもそも跡取りとなる男児がなかなか生まれない場合もある。農家1（付表1）では、経営主の子どもは、長女、2女、3女と続き、経営主が32歳のときにようやく長男が生まれている。農家3（付表2）では、長女、2女、3女、4女と続いた後に長男が生まれるが、経営主はすでに41歳である。おそらく長男が成人し妻を迎えるのを「鶴首して」待つのであろうが、首尾よくそれが実現したとしても、そのころ農家3の経営主は65歳を過ぎており、「栄華の峠」は望めそうもない。

また、農家4（付表3）では、調査開始の大正11年に23歳の長男はすでに21歳の妻を迎えていたが、それから8年後の調査終了時にも彼らの子どもはいない。農家5（付表4）は複雑な事例である。調査開始時の大正11年において、36歳の経営主と35歳の妻には、9歳の3女、7歳の4女がいる。長女と2女の所在は不明である。そして、3歳の男児を養子としている。しかし、その年には4男が生まれている。長男、2男、3男の所在も不明である。報告書にはこれ以上の情報は記載されていないが、幼くして命を落とす者が少なくなかったこの時代、跡取りの確保をめ

図3 年間労働時間の推移 (農家2)



ぐって人々が腐心していたことがうかがわれる。

2-2. 都会付近地方の自小作農家（表1の農家11）

これまでは人口学的条件が整わないために、直系家族の世代的再生産が難航していた事例をみてきた。つぎは、産業化と農家経営との関わりをみていこう。ここで取り上げるのは、遠賀郡の自小作農家である。報告書によれば「八幡市に接近している関係上蔬菜の栽培がさかん」⁷⁾な地域である。

分析に入る前に、戦前期の福岡県における鉱工業と農業の関係について述べておこう。この時代の福岡県は鉱工業の発展が目覚ましく、近代産業の基幹をなす「石炭と鉄」の供給基地であった。筑豊や三池の炭鉱業の発展に続き、明治34年には戦前日本最大の製鉄所である官営八幡製鉄所が設置され、それを中心として一大工業地帯が形成されていった。鉱工業の急激な発展は福岡県の農家経営に大きな影響を及ぼしたが、なかでも2つの点に注目しておきたい。第1は、農村地帯あるいはその近接地に巨大な労働市場が開けたことである。第2は、その結果、この地域の労賃が高騰し、農業労働者の確保が困難になったことである¹⁾。

この農家のある遠賀郡は、八幡製鉄所が立地する八幡市に隣接している。報告書の判定では「労働者雇用の難易」は「難」である³⁾。福岡県農会の「都市並ニ鉱工業発達ノ農村ニ及ボス影響ニ

表4 農家経済の推移（農家11）

| | | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 ³⁾ |
|---|-------------------|--------|--------|---------|--------|--------|----------------------|
| | 経営面積（反） | 26.8 | 26.9 | 27.9 | 28.7 | 28.5 | 28.5 |
| | 所有 | 10.6 | 10.6 | 11.7 | 18.1 | 17.9 | — |
| | 借入 | 16.2 | 16.2 | 16.2 | 10.6 | 10.6 | — |
| A | 農業粗収入（円） | 2111.7 | 3447.1 | 2845.9 | 3180 | 3849.4 | 3857.7 |
| B | 農業経営費 | 1168.9 | 1728.1 | 4223.4 | 1942.7 | 2143.6 | 1971.1 |
| | 經常 | 1168.9 | 1065.1 | 1299.2 | 1798.1 | 1844.8 | 1906.2 |
| | 臨時 | 0.0 | 663.0 | 2924.2 | 144.6 | 298.8 | 64.9 |
| | うち小作料 | 501.6 | 349.4 | 461.7 | 359.6 | 368.0 | — |
| C | 農業所得 A - B | 942.8 | 1719.0 | -1377.5 | 1237.3 | 1705.8 | 1886.6 |
| D | 農外所得 | 2229.5 | 776.3 | 1369.0 | 1536.7 | 435.8 | — |
| | 俸給労賃等 | 716.2 | 709.7 | 683.5 | 753.4 | 124.5 | — |
| | 財産利用収入 | 450.0 | 4.5 | 250.0 | 300.0 | 75.0 | — |
| | 農業以外生産物収入 | — | — | — | 0 | 11.7 | — |
| | その他農外所得 | 1063.3 | 62.1 | 435.5 | 483.3 | 224.6 | — |
| E | 農家所得 C + D | 3172.3 | 2495.3 | -8.5 | 2774.0 | 2141.6 | — |
| F | 家計費 ¹⁾ | 2634.5 | 2200.7 | 2304.6 | 2075.4 | 2309.3 | 2158.9 |
| | うち飲食費 | 192.9 | 1238.7 | 671.4 | 721.1 | 714.4 | 795.4 |
| | うち被服費 | 352.8 | 219.1 | 168.5 | 278.1 | 198.7 | 353.0 |
| | うち保健衛生費 | 184.6 | 190.2 | 82.9 | 63.7 | 134.5 | 344.2 |
| | うち冠婚葬祭費 | 794.4 | 1.9 | 265.3 | 25.3 | 393.0 | 82.6 |
| | うち教育費 | 11.6 | 13.2 | 23.0 | 47.2 | 6.1 | 7.7 |
| G | 諸負担 ²⁾ | 92.3 | 107.0 | 172.8 | 169.3 | 186.2 | 150.3 |
| H | 農家経済余剰 E - F - G | 445.5 | 187.6 | -2485.8 | 529.3 | -354.0 | — |

(1) 大正10年の家計費は現金支出額である。それ以外の年は、現金支出額と現物支出額を合計した金額である。

(2) 大正10、12、昭和5年の諸負担の金額は農業に関わるもののみであり、それ以外は含まない。

(3) 大正15年/昭和元年に行われた調査の報告書（『農家経済報告書』第4編）は入手不能であったので、この列の数値はすべて『農家経済調査累年比較に就て（農家経済調査第6編付録）』から拾ったものである。

表5 家族構成の推移（農家11）

（表中の数値は各年の年齢）

| 農家11 都会付近地方 自作兼小作農家 | | | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 |
|------------------------|-------|---|-------|---------|--------|--------|-----------|
| 1 | 経営主 | 男 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 |
| 2 | 妻 | 女 | | 52 | 53 | 57 | 58 |
| 3 | 長男 | 男 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 |
| 4 | 長男妻 | 女 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 |
| 5 | 母 | 女 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 |
| 6 | 二男 | 男 | 22 | 23（職工） | 24（職工） | 24（職工） | 25（養子に行く） |
| 7 | 三男 | 男 | 19 | 20 | 21 | 22（入営） | 23 |
| 8 | 四男 | 男 | 16 | | | | 20（店員で不在） |
| 9 | 五男 | 男 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| 10 | 三女 | 女 | 23 | | | | |
| 11 | 長男の長女 | 女 | 1（出生） | 2 | 3（死亡？） | | |
| 12 | 長男の二女 | 女 | | | 1（出生） | 2 | 3 |
| 家族員の変動 | | | 10 | 10→11→9 | 9→10→9 | 9 | 9→8 |

関スル調査」によれば、明治40年の遠賀郡では工場数7、従業員数380人に過ぎなかったが、累年増加し、大正8年末には37工場、従業員数9100余人に達するに至った。工場の隆盛に伴い、かつては男性の平均賃金は55銭、女性は29銭であったのが、男性の平均は1円77銭、女性は81銭に達した。大正8年後半期以後、一般経済界の沈衰により工場27、従業員数7148人になり、前年比約2割減少としたにもかかわらず、従業者の賃金は依然低落しなかったという¹²⁾。これを念頭におきながら、家族と労働と経済の推移をみていくことにしよう。この農家は、大正14年で調査を打ち切っているのだから、ここで見ることは、大正10年から14年までの5年間の推移である。

はじめに、表4「農家経済の推移」にもとづき、この農家の農業経営と家計の特徴をみておこう。調査開始時の農業経営面積は26.8反で、大規模な農業経営といえる。うち所有地は10.6反である。農業粗収入は2112円、農業経営費1169円（うち小作料は502円）で、前者から後者を引いた農業所得は943円である。そのほかに2230円の農外所得があるが、このうち716円は俸給労賃等であり、のちに述べるように、八幡製鉄所に勤める2男の俸給である。農業所得と農外所得を合計した農家所得は3172円で、農家2と比べるとかなり多い。しかし、都会地に近接しているため、家計費も2635円と多くなっている。農家経済余剰は446円の黒字である。調査担当者はこの農家を「標準よりも高い農家である」と評している⁸⁾。

つぎに、表5から調査開始時の家族構成をみると、経営主は45歳で、その妻は不在であるが、翌年からは52歳の妻がいる。それに、長男夫婦（25歳と21歳）、母（73歳）、長男の長女（1歳）の直系4世代と、2男（22歳）・3男（19歳）・4男（16歳）・5男（8歳）・3女（12歳）の傍系親族5人を含む大家族である。

図4「年間労働時間の推移」のなかの家事時間（図4-3）をみると、家事はもっぱら73歳の母が引き受けており、それ以外の成人女性（経営者の妻と長男の妻）は農業労働を主としている。長男の妻は大正10年と大正12年に出産しているが、農事時間（図4-2）はそれぞれ2251時間と1686時間であり、その前後とほぼ同じくらいの時間を農作業に費やしている。

表6 農家の労働時間配分（1933年）斎藤（1991）P35より転載

| 男女別 年齢階層 | 総労働時間 | 内 訳 | | | | 農業労働 日数 |
|-------------|--------|------|------|------|------|------------|
| | | 農業労働 | 兼業労働 | 家事労働 | その他 | |
| 男子 | 時間 | % | % | % | % | 日 |
| 15歳未満 | 739.3 | 69.6 | 2.0 | 22.5 | 5.9 | 75.1 |
| 16-20歳 | 2349.9 | 66.5 | 17.3 | 9.4 | 6.7 | 185.7 |
| 21-30歳 | 3232.4 | 58.8 | 23.2 | 9.3 | 8.7 | 238.0 |
| 31-50歳 | 3393.6 | 63.5 | 14.5 | 11.9 | 10.1 | 241.1 |
| 51-60歳 | 3215.6 | 67.8 | 8.5 | 15.1 | 8.6 | 251.2 |
| 61-70歳 | 2413.6 | 63.7 | 12.1 | 19.0 | 5.2 | 187.8 |
| 71歳以上 | 1860.2 | 62.7 | 2.8 | 30.8 | 3.6 | 199.5 |
| 女子 | | | | | | |
| 15歳未満 | 814.3 | 38.6 | 7.0 | 49.9 | 4.5 | 50.4 |
| 16-20歳 | 2223.9 | 49.0 | 6.8 | 41.5 | 2.7 | 139.8 |
| 21-30歳 | 3064.4 | 49.9 | 3.4 | 43.7 | 3.0 | 196.7 |
| 31-50歳 | 3439.8 | 48.4 | 3.6 | 45.2 | 2.8 | 209.6 |
| 51-60歳 | 3011.8 | 36.7 | 3.4 | 56.8 | 3.1 | 163.2 |
| 61-70歳 | 2510.1 | 29.8 | 1.2 | 66.9 | 2.1 | 130.1 |
| 71歳以上 | 1403.3 | 12.7 | 0.4 | 86.1 | 0.8 | 40.3 |

出典：帝国農会経済部『農家の労働状態に関する調査（主として男女別労働に就て）』（帝国農会刊、1938年）、30頁。

比較のために全国的数値を掲げておこう。表6は、1933年の帝国農会調査に基づき、斎藤が全国292戸の農家の労働時間をまとめたものである¹³⁾。これによると、21～30歳女子の総労働時間は3064時間で、農業労働と家事労働はほぼ1：1となっている。それに比べると、農家2の長男の妻の総労働時間は3000～3500時間であるが、農事時間と家事時間の比率はだいたい2：1である。経営主の妻も同様の比率となっている。全国と比べると農業に重点をおいた時間配分である。

その背景にはこの地域に特殊な事情がある。この農家の経営面積は広く、多くの労働力を必要とする。しかし、近傍に有利な就業先があるため、2男は職工、4男は店員として働いており、農業に携わっていない。また、この地域の労賃は高騰しているため農業労働者を雇うことも難しい。したがって、妊娠・出産期の女性も農業労働者として働くことが期待されていたのであろう。

注目されるのは、2男の働き方である。彼は八幡製鉄所の職工として働いており、毎月600円～700円の俸給を得ている。2-1で取り上げた農家2の経営主の下の弟の奉公中の仕送り額が170～180円であったことを顧みるとかなりの高給である。その後、2男は26歳で養子に出ていくが、この農家ではそれに先立つ大正12年に約3000円の臨時費を投じて農業用地を購入している（大正12年の農業経営費が突出しているのはそのためである）。その結果、経営面積に占める所有地と借入地の比率は12：16から18：11へと逆転している（表4）。2男の現金収入があればこそであろう。

2-1でみた農家2の弟の生き方には、農家の存続を陰で支えてきた傍系親族の悲哀が滲んでいたが、農家11の2男にはそのような影はない。むしろ、傍系の身軽さゆえに、製鉄所勤務という新たなライフチャンスを得ることができた。同様の事例は、同じ遠賀郡の農家12（付表10）にも見いだせる。ここでも、経営主の弟が製鉄所に勤務し、500～600円の月給を得ている。これらの事例は、新たに開かれた近代的な労働市場に吸収されたのはおもに農家の傍系成員であったという従来の見解を傍証している。それに加えて、傍系成員が有利な雇用機会を得たことは、彼自身の人生を明るく照らし出したのみならず、家業にも少なからぬ恩恵をもたらしたことを、農家

11の事例は示している。

2-3. 都会地付近地方の小作農（表1の農家13）

最後に取り上げるのは、農家11と同じ遠賀郡にある小作農家である。ここも大正14年で調査を打ち切っているため、大正10年から14年までのデータに限られている。

表7「農家経済の推移」に基づき、この農家の農業経営と家計の特徴をみていこう。調査開始時の農業経営面積は12.3反で、うち所有地は0.8反にすぎない。農業粗収入は1224円、農業経営費904円（うち小作料は542円）であり、前者から後者を引いた農業所得は320円である。そのほかに585円の農外所得がある。後述するように、これはおもに経営主の兼業収入によるものである。農業所得と農外所得を合計した農家所得は905円であり、ここから家計費832円と諸負担32円を差し引いた農家経済余剰は41円の黒字である。

つぎに、表8の家族構成の推移をみていこう。調査開始時は、経営主夫婦（34歳・29歳）、その両親（59歳・60歳）、幼い子どもたち（7歳・1歳）という直系家族である。さきにもみた農家11とは異なり、傍系親族がいないため、製鉄所に働きに出せるような余剰労働力はない。そこで、経営主自身が副業として製鉄所関連の馬車挽き仕事に励み、農外収入を稼ぐのである。

図5「年間労働時間の推移」のなかの農事時間（図5-2）をみると、経営主の農事時間は少

表7 農家経済の推移（農家13）

| | | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 ⁽³⁾ |
|---|--------------------|--------|--------|--------|--------|---------|-----------------------|
| | 経営面積（反） | 12.3 | 12.3 | 12.8 | 12.8 | 11.3 | 15.0 |
| | 所有 | 0.8 | 0.8 | 1.3 | 1.3 | 2.5 | 7.4 |
| | 借入 | 11.5 | 11.5 | 11.5 | 11.5 | 8.7 | 7.5 |
| A | 農業粗収入（円） | 1223.9 | 1028.7 | 1036.3 | 1640.7 | 1468.3 | 1617.1 |
| B | 農業経営費 | 903.6 | 786.0 | 778.8 | 1759.5 | 3290.1 | 1031.2 |
| | 經常 | 903.6 | 603.1 | 678.8 | 1160.4 | 987.5 | 992.7 |
| | 臨時 | 0.0 | 182.9 | 100.0 | 599.1 | 2302.6 | 38.5 |
| | うち小作料 | 542.3 | 330.3 | 382.7 | 547.8 | 291.1 | — |
| C | 農業所得 A - B | 320.3 | 242.7 | 257.5 | -118.8 | -1821.8 | 585.9 |
| D | 農外所得 | 584.5 | 477.7 | 602.4 | 784.2 | 654.0 | — |
| | 俸給労賃等 | 110.0 | 35.0 | 45.0 | 678.4 | 387.5 | — |
| | 財産利用収入 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 65.3 | — |
| | 農業以外生産物収入 | — | — | — | 0.0 | 18.4 | — |
| | その他農外所得 | 474.5 | 442.7 | 557.4 | 105.8 | 182.8 | — |
| E | 農家所得 C + D | 904.8 | 720.4 | 859.8 | 665.4 | -1167.8 | — |
| F | 家計費 ⁽¹⁾ | 831.7 | 867.4 | 561.9 | 856.6 | 976.3 | 1038.1 |
| | うち飲食費 | 132.7 | 465.9 | 313.5 | 461.8 | 557.6 | 513.8 |
| | うち被服費 | 49.2 | 40.6 | 10.9 | 35.1 | 34.1 | 35.2 |
| | うち保健衛生費 | 34.8 | 31.3 | 19.9 | 56.7 | 139.1 | 183.9 |
| | うち冠婚葬祭費 | 4.7 | 79.6 | 38.9 | 38.2 | 8.5 | 50.4 |
| | うち教育費 | 14.0 | 1.6 | 1.7 | 7.2 | 1.1 | 3.9 |
| G | 諸負担 ⁽²⁾ | 32.3 | 50.9 | 40.8 | 77.9 | 81.9 | 66.7 |
| H | 農家経済余剰 E - F - G | 40.8 | -197.9 | 257.2 | -269.2 | -2225.9 | — |

(1) 大正10年の家計費は現金支出額である。それ以外の年は、現金支出額と現物支出額を合計した金額である。

(2) 大正10、12、昭和5年の諸負担の金額は農業に関わるもののみであり、それ以外は含まない。

(3) 大正15年/昭和元年に行われた調査の報告書（『農家経済報告書』第4編）は入手不能であったので、この列の数値はすべて『農家経済調査累年比較に就て（農家経済調査第6編付録）』から拾ったものである。

表8 家族構成の推移（農家13）

（表中の数値は各年の年齢）

| 農家13 | 都会付近地方 | 小作農 | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 |
|--------|--------|-----|-------|-----|-----|-------|-----|
| 1 | 経営主 | 男 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 |
| 2 | 妻 | 女 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 |
| 3 | 父 | 男 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 |
| 4 | 母 | 女 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 |
| 5 | 長女 | 女 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 |
| 6 | 二女 | 女 | 1（出生） | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 7 | 長男 | 男 | | | | 1（出生） | 2 |
| 家族員の変動 | | | 5→6 | 6 | 6 | 6→7 | 7 |

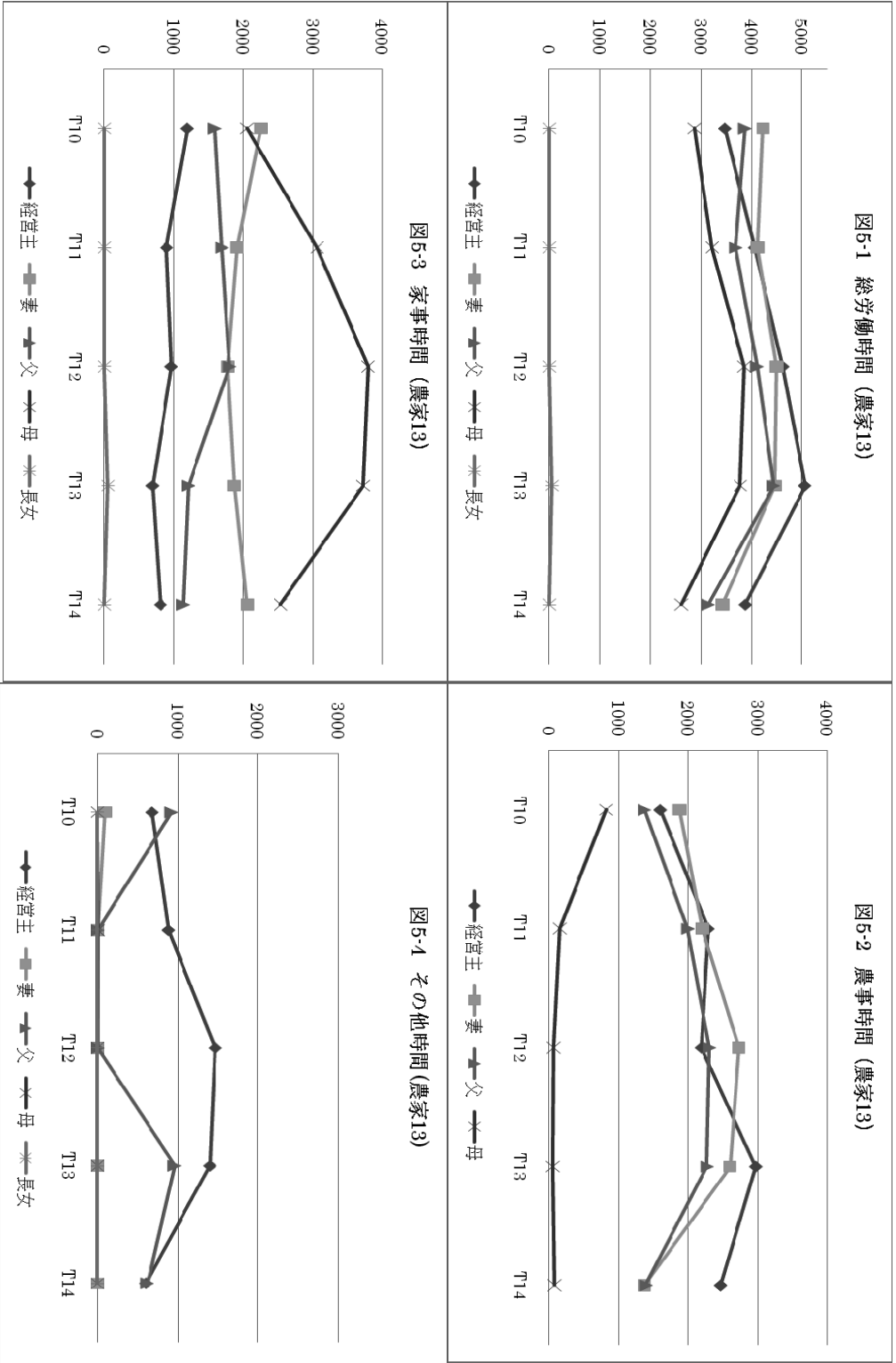
ないときで1602時間、多いときには2969時間である。これに加え、大正12年には1467時間、13年には1401時間をその他の労働にあてている（図5-4）。その他の労働時間とは、馬車挽き人夫として働く時間である。表7「農家経済の推移」上では、馬車挽きの賃金は、大正12年までは「その他農外賃金」に、大正13年からは「俸給労賃等」に仕訳されている。これらを通してみると、大正11年から13年にかけて毎年400円～600円の賃金を得ていることが分かる。

大正8年から昭和2年にかけて、政府は、八幡製鉄所へ水を供給するために板櫃川をせき止めて河内貯水池を建設した。これは鋼材年産65万トンを目指した第三次拡張計画に沿ったものである。工事は人力作業を主として進められ、工事従事者延べ90万人と称される大事業であった。本事例の経営主はこの工事に、兼業労働者として従事したのである。その結果、農事時間・家事時間・その他労働時間を合わせた総労働時間（図5-1）は、大正12年には4627時間、13年には5063時間に及んでいる。他事例のほぼ同年代の跡取り男性と比べてみよう。農家2の経営主の総労働時間の最高値は4136時間、農家11の長男のそれは3422時間である。表6から全国の動向をみると、31-50歳男子の総労働時間は3394時間である。この経営主の労働時間は飛びぬけて長いといえる。

農業経営における経営主の不在を補うために、他の家族成員の総労働時間も3000時間から4500時間という高い水準にある。とくに経営主の妻は大正10年と13年に出産しているにもかかわらず、それぞれの農事時間は1878時間と2600時間、総労働時間は4232時間と4472時間である。農家2の経営主の妻が昭和2年に出産したときをみると、農事時間は342時間、総労働時間は3174時間であった。農家11の長男の妻が大正10年と12年に出産したときには、農事時間は2251時間と1686時間と高水準であるが、総労働時間は3271時間と3057時間にとどまっている。表6によれば、全国の31～50歳女子の総労働時間は3440時間である。経営主の妻もまた、妊娠・出産が続くなかでじつによく働いていたのである。

身を削るような長時間労働に励んだ甲斐あって、大正14年には約2300円の臨時費を投じて農業用地を購入するに至る。その結果、大正10年には0.8：11.5であった所有地と借入地の比率は、大正15年には7.4：7.5とほぼ半々になった。経営主が大正10年～13年の間に稼いだ農外賃金の合計は約2200円で農地購入金額にはほぼ相当する。彼は農家の跡取りとしての役割を果たしつつ、貯水池建設工事を千載一遇の機会ととらえ、小作から自小作へと転じていったのである。それはもちろん、経営主の才覚と家族挙げての刻苦精励の賜物であるが、それとともに家族全員が無事息災に過ごせたという「順境」⁸⁾に与るところが大きかったことを忘れてはならないだろう。

図5 年間労働時間の推移 (農家13)



3. おわりに

前述のとおり、福岡県農会が選定した調査対象は「標準農家」であったが、それにもかかわらず、ここで取り上げた農家がたどった道のりはじつに多岐にわたっている。それは、平均寿命が短く夭折する者が少なくなかったこの時代、農家経営の基盤となる直系家族の世代的再生産自体が容易ではなかったからである。そして、激しい社会経済的変動のなかで、農家は存続と発展をかけてさまざまな家族戦略を展開したからである。

福岡県の場合には、「石炭と鉄」の供給地として鉱工業が目覚ましく発達したことが、農家のとりうる家族戦略に大きな影響を及ぼしていた。本稿で取り上げた農家11と農家13は、近接地に有利な農外就業機会が開かれたことが、傍系親族や跡取り自身の農外就業を通じて、農家経営の発展をもたらしたことを示していた。

しかし、すべての農家が鉱工業の発展の恩恵を受けたわけではなかった。福岡県農会は、昭和6年から16年にかけて第三期農家経済調査を実施したが、その報告書には、土地の陥落・傾斜や水質汚染など炭鉱がもたらす被害によって農地を失ってしまった事例や、さらに、経営主自身が炭鉱夫として働き始めた事例が含まれている。続く第2報では、これらの事例を分析していく予定である。

【文献】

- 1) 鈴木栄太郎：日本農村社会学原理 日本評論社 東京，1940.
- 2) 福岡県農会：農家経済調査 福岡，1925.
- 3) 福岡県農会：農家経済調査 第2編 福岡，1926.
- 4) 福岡県農会：農家経済調査 第3編 福岡，1927.
- 5) 福岡県農会：農家経済調査 第5編 福岡，1929.
- 6) 福岡県農会：農家経済調査 第6編 福岡，1930.
- 7) 福岡県農会：農家経済調査 第7編 福岡，1930b.
- 8) 福岡県農会：農家経済調査累年比較に就て（農家経済調査第6編付録） 福岡，1930c.
- 9) 福岡県農会：農家経済調査 第8編 福岡，1931.
- 10) 一橋大学経済研究所附属社会科学統計情報研究センター：農家経済調査データベース編成報告書 Vol.1 農家経済調査マニュアル集成 1.2008.
- 11) 坂根嘉弘：労働市場の展開と農業問題—福岡県農業問題研究序説 福岡県史近代研究編各論（2） 西日本文化協会，福岡，p.145-188，1996.
- 12) 福岡県農会：都市並ニ鉱工業発達ノ農村ニ及ボス影響ニ関スル調査 福岡，1922.
- 13) 斎藤修：農業発展と女性労働 経済研究，42：31-41，1991.

付表 1

| 農家 1 | 田を主とする地方 | 自作農 | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 | S2 | S3 | S4 | S5 |
|--------|----------|-----|-------|--------|-----|-----|-----|---------------|-------|----|-------|----|
| 1 | 父 | 男 | 73 | 74(死亡) | | | | | | | | |
| 2 | 母 | 女 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 |
| 3 | 経営主 | 男 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 44 | 45 |
| 4 | 妻 | 女 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 |
| 5 | 長女 | 女 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19(家事見習い(他出)) | 20 | 21 | 22 | 23 |
| 6 | 二女 | 女 | 12 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
| 7 | 三女 | 女 | 6 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 |
| 8 | 長男 | 男 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| 9 | 四女 | 女 | 1(出生) | | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
| 10 | 五女 | 女 | | | | | | | 1(出生) | 2 | 3 | 4 |
| 11 | 二男 | 男 | | | | | | | | | 1(出生) | 2 |
| 家族員の変動 | | | 8 | 8→9→8 | 8 | 8 | 8 | 8→7 | 7→8 | 8 | 8→9 | 9 |

付表 2

| 農家 3 | 田を主とする地方 | 小作農 | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 | S2 | S3 | S4 | S5 | | |
|--------|----------|-----|-----|-----|------|-----|----------|----------|----------|----------|----|-----|---|---|
| 1 | 母 | 女 | 77 | 78 | 79死亡 | | | | | | | | | |
| 2 | 経営主 | 男 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | | |
| 3 | 妻 | 女 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | | |
| 4 | 長女 | 女 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19(6月奉公) | 20 | 21 | | |
| 5 | 二女 | 女 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14(子守奉公) | 15(子守奉公) | 16(子守奉公) | 17(奉公) | 18 | 19 | | |
| 6 | 三女 | 女 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | | |
| 7 | 四女 | 女 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | | |
| 8 | 長男 | 男 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | | |
| 9 | 五女 | 女 | | | | | | | 1(出生) | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 10 | 二男 | 男 | | | | | | | 1(出生) | | 2 | 3 | 4 | |
| 家族員の変動 | | | 8 | 8 | 8→7 | 7 | 8 | 8 | 9 | 9 | 9 | 9→8 | | |

付表 3

| 農家 4 | 田畑相半し養蚕を営む地方 | 自作農 | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 | S2 | S3 | S4 | S5 | |
|--------|--------------|-----|-----|-----|-----|----------|-----|--------|----|----|----|----|----|
| 1 | 母 | 女 | | 73 | 74 | 75 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | |
| 2 | 経営主 | 男 | | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | |
| 3 | 妻 | 女 | | 50 | 51 | 52 | 53 | 57 | 55 | 56 | 57 | 58 | |
| 4 | 長男 | 男 | | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | |
| 5 | 長男妻 | 女 | | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | |
| 6 | 二女 | 女 | | 21 | 22 | 23(婚出) | | | | | | | |
| 7 | 二男 | 男 | | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | |
| 8 | 三男 | 男 | | 11 | 12 | 13(中学入学) | | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 17 |
| 家族員の変動 | | | | 8 | 8 | 8→7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | |

付表4

| 農家5 田畑相半し養蚕を営む地方 小作農 | | | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 | S2 | S3 | S4 | S5 |
|----------------------|-----|---|-------|-----|-----|-------|-----|--------|-------|----|----|----|
| 1 | 母 | 女 | 74 | 75 | 76 | 77 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 |
| 2 | 経営主 | 男 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 |
| 3 | 妻 | 女 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 |
| 4 | 三女 | 女 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 |
| 5 | 四女 | 女 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 17 | 15 | 16 |
| 6 | 養子 | 男 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| 7 | 四男 | 男 | 1(出生) | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 8 | 五女 | 女 | | | | 1(出生) | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 9 | 五男 | 男 | | | | | | | 1(出生) | 2 | 3 | 4 |
| 家族員の変動 | | | 6→7 | 7 | 7 | 7→8 | 8 | 8 | 9 | 9 | 9 | 9 |

付表5

| 農家6 田畑相半し養蚕を営む地方 自作兼小作農 | | | | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 | S2 | S3 | S4 | S5 |
|-------------------------|-----|---|--|-----|-----|-----|-----|-----|--------|----|----|----|----|
| 1 | 母 | 女 | | 82 | | | | | | | | | |
| 2 | 経営主 | 男 | | 51 | | | | | | | | | |
| 3 | 妻 | 女 | | 50 | | | | | | | | | |
| 4 | 長男 | 男 | | 27 | | | | | | | | | |
| 5 | 二男 | 男 | | 23 | | | | | | | | | |
| 6 | 三男 | 男 | | 16 | | | | | | | | | |
| 7 | 五男 | 男 | | 8 | | | | | | | | | |
| 家族員の変動 | | | | 7 | | | | | | | | | |

付表6

| 農家7 共同経営をなす地方付近 自小作農 | | | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 | S2 | S3 | S4 | S5 | |
|----------------------|----------|---|-----|--------|--------|--------|-------|--------|----------|-------------|-----------|----|---|
| 1 | 母 | 女 | | 92 | 93 | 94(死亡) | | | | | | | |
| 2 | 経営主 | 男 | | 53 | 54 | 55(重患) | 56 | 57 | 58 | 59 | | | |
| 3 | 妻 | 女 | | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | | | |
| 4 | 長男 | 男 | | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | | | |
| 5 | 長男妻 | 女 | | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | | | |
| 6 | 二男 | 男 | | 22(他出) | 23(帰宅) | 24 | 24 | 25 | 26(表具見習) | 27(車掌見習・他出) | | | |
| 7 | 三男 | 男 | | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | | | |
| 8 | 孫(長男の長女) | 女 | | 1(出生) | 2 | 3 | 4(死亡) | | | | | | |
| 9 | 孫(長男の二女) | 女 | | | | | | 1(出生) | 2 | 3 | | | |
| 10 | 孫 | 男 | | | | | | | 1(出生) | 2 | | | |
| 11 | 二男妻 | 女 | | | | | | | | | 27(婚入・他出) | | |
| 家族員の変動 | | | 8 | | 8 | | 7→6 | | 6→7 | | 7→8 | | 8 |

付表 7

| 農家 8 | 都会付近地方 | 自作農 (その 1) | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 | S2 | S3 | S4 | S5 |
|--------|--------|------------|-----|--------|-----|-----|-----|--------|----|----|----|----|
| 1 | | 母 女 | 69 | 70 | 71 | | | | | | | |
| 2 | | 経営主 男 | 43 | 44 | 45 | | | | | | | |
| 3 | | 妻 女 | 42 | 43 | 44 | | | | | | | |
| 4 | | 二男 男 | 21 | 22 | 23 | | | | | | | |
| 5 | | 三男 男 | 14 | 15(学生) | 16 | | | | | | | |
| 6 | | 四男 男 | 11 | 12(学生) | 13 | | | | | | | |
| 7 | | 長女 女 | 17 | (婚出?) | | | | | | | | |
| 家族員の変動 | | | 7 | 7→6 | 6 | | | | | | | |

付表 8

| 農家 9 | 都会付近地方 | 自作農 (その 2) | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 | S2 | S3 | S4 | S5 |
|--------|--------|------------|-----|-----|-----|-----|-----|--------|----|----|----|----|
| 1 | | 祖父 男 | | | | 81 | 82 | | | | | |
| 2 | | 祖母 女 | | | | 62 | 63 | | | | | |
| 3 | | 父 男 | | | | 48 | 49 | | | | | |
| 4 | | 母 女 | | | | 45 | 46 | | | | | |
| 5 | | 経営主 男 | | | | 23 | 24 | | | | | |
| 6 | | 妹 女 | | | | 22 | 23 | | | | | |
| 7 | | 弟 男 | | | | 17 | 18 | | | | | |
| 8 | | 弟 男 | | | | 13 | 14 | | | | | |
| 9 | | 弟 男 | | | | 2 | 3 | | | | | |
| 10 | | 妹 女 | | | | 14 | 15 | | | | | |
| 11 | | 妹 女 | | | | 9 | 10 | | | | | |
| 12 | | 従弟 男 | | | | 13 | 14 | | | | | |
| 家族員の変動 | | | | | | 12 | 12 | | | | | |

付表 9

| 農家10 | 都会付近地方 | 自作農 (その 3) | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 | S2 | S3 | S4 | S5 |
|--------|--------|------------|-----|-----|-----|-----|-----|--------|--------|----|----|----|
| 1 | | 母 女 | | | | | | 64 | 65(死亡) | | | |
| 2 | | 経営主 男 | | | | | | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 |
| 3 | | 妻 女 | | | | | | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 |
| 4 | | 長女 女 | | | | | | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 家族員の変動 | | | | | | | | 4 | 4→3 | 3 | 3 | 3 |

付表10

| 農家12 都会付近地方 自作農（その2） | | | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 | S2 | S3 | S4 | S5 |
|-------------------------|-----|---|-----|-----|-----|-----|-----|--------|---------------|---------------|---------------|------------------|
| 1 | 祖母 | 女 | | | | | | | 64 | (死亡?) | | |
| 2 | 父 | 男 | | | | | | | 53 | 54 | 55 | 56 |
| 3 | 母 | 女 | | | | | | | 53 | 54 | 55 | 56 |
| 4 | 経営主 | 男 | | | | | | | 32 | 33 | 34 | 35 |
| 5 | 妻 | 女 | | | | | | | 30 | 31 | 32 | 33 |
| 6 | 長男 | 男 | | | | | | | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 7 | 二男 | 男 | | | | | | | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 8 | 長女 | 女 | | | | | | | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 9 | 弟 | 男 | | | | | | | 22(製鉄所 勤務) | 23(製鉄所 勤務) | 24(製鉄所 勤務) | 25(製鉄所 勤務・分家) |
| 10 | 弟妻 | 女 | | | | | | | | | 22(婚入) | 23(分家) |
| 11 | 弟長女 | 女 | | | | | | | | | 1(出生) | 2(分家) |
| 家族員の変動 | | | | | | | | | 9 | 9→8 | 8→10 | 10→7 |

付表11

| 農家14 都会付近地方 自作農（その2） | | | T10 | T11 | T12 | T13 | T14 | T15/S1 | S2 | S3 | S4 | S5 |
|-------------------------|-----|---|-----|-----|-----|-----|-----|--------|-------|--------------------|--------|--------|
| 1 | 父 | 男 | | | | | | | 62 | 63 | 64 | 65 |
| 2 | 母 | 女 | | | | | | | 57 | 58 | 59(死亡) | |
| 3 | 経営主 | 男 | | | | | | | 27 | 28 | 29 | 30 |
| 4 | 妻 | 女 | | | | | | | 26 | 27 | 28 | 29 |
| 5 | 弟 | 男 | | | | | | | 21 | 22(東京西ヶ原 養蚕講習所) | 23(入営) | 24(退営) |
| 6 | 妹 | 女 | | | | | | | 17 | | | |
| 7 | 長女 | 女 | | | | | | | 6 | 7 | 8 | 9 |
| 8 | 二女 | 女 | | | | | | | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 9 | 長男 | 男 | | | | | | | 1(出生) | 2 | 3 | 4 |
| 10 | 二男 | 男 | | | | | | | | | 1(出生) | 2 |
| 家族員の変動 | | | | | | | | | 8→9 | 9 | 9→10→9 | 9 |